

現代日本語の「つつある」の事象投射構造的分析

小西 正人

本稿では、現代日本語の動詞接続表現「つつある¹⁾」について、岩本(2008)で提唱された事象投射構造理論に基づく構造表示を提示する²⁾。

はじめに第1節において、「つつある」を現代日本語のアスペクト体系の成員をなすものとして詳細に記述を行った副島(2007)をとりあげ、「つつある」の意味を整理するとともに内容について再検討を行う。次の第2節において、第1節で示した意味のうち基本的なものについて、岩本(2008)で提唱された事象投射構造理論に基づく構造表示を提示し、形式的な分析を行う。そして第3節において、基本的な構造に収まらない「つつある」の事象構造について、当該の現象を示すとともに、それぞれの概念構造を提示する。

1 副島(2007)による「シツツアル」の分析

1.1 副島(2007)の主張について

副島(2007)は、現代日本語の「つつある」について、多くの実例をもとに包括的に取り扱った研究である。本節ではまず副島(2007)の主張について簡単に見てみることにする。

まず副島(2007)では「シツツアル」を現代日本語のアスペクトカテゴリーを構成する成員であるとし、以下の対立をもつと述べている(副島2007: 59)。

	スル	シツツアル	シテイル	シテアル
継続性	－	＋	＋	＋
不完結性	(－)	＋	－	－
結果性	(－)	－	＋	＋
対象指向性	(－)	(＋)	－	＋

ここで副島(2007)は「シツツアル」を不完結相と位置づけ、他の「スル(非継続相)」「シテイル(主体結果相)」「シテアル(客体結果相)」と対立をなすものとして分析を行っている。本稿では文法範疇としてのアスペクト(あるいはアスペクト体系)については特に論じず、動詞連用形に接続する形式である「つつある」が表すそれぞれの意味について、事象投射構造理論における分析と投射構造の提示を目的とする。

そして副島(2007)では《不完結》相を表す表現である「シツツアル」について、以下の記述を行っている³⁾(cf. 副島2007: 97)。

I. 基本的意味

1. 変化の不完結：限界動詞(外的限界をもつ非限界動詞も含む)であれば、その動詞の表す変化の不完結な進行過程を表す。

(1) a. 日本上空の強い寒気は東海上に去りつつあり、…(副島2007: 76)

b. 新しい民政方と会計方の機関を整備しつつあった。(副島2007: 82)

2. 動きの開始局面の不完結：非限界動詞であれば、外的限界が与えられない限り、動きの始まり

の瞬間の不完結な進行過程を表す。

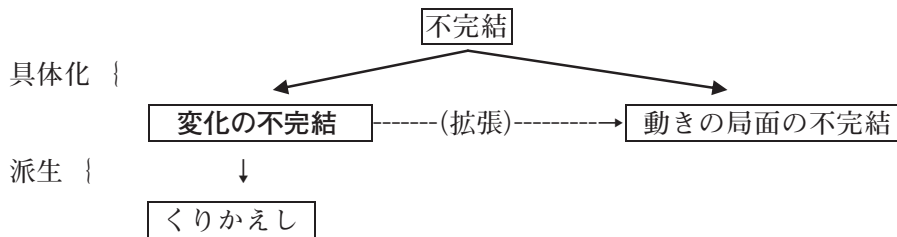
- (2) a. 太郎は花子をなぐりつつあった。(副島 2007: 89)
b. その時、列車は、ゆっくりと走りつつあった。(副島 2007: 90)

II. 派生的意味

3. くりかえし：限界動詞・非限界動詞にかぎらず、変化するものが複数であれば、動詞の表す動作の繰り返しの不完結な進行過程を表す。

- (3) a. その頃、村人達は、食糧不足のためにどんどん死につつあった。(副島 2007: 94)
b. 安芸の小豪族や周防の大内氏旧臣が次々と戦列に加わりつつある。(副島 2007: 95)

そしてすべての「シツツアル」に共有される「不変的意味」は「動詞（およびその補語とそれらにかかわる修飾表現）の表す動作の変化の局面をとりたて、基準時点において、その変化を不完結な状態としてとらえ、さしだす」（副島 2007: 99）というものであると述べ、上述の3つの意味の関係を以下のように図示している。



しかし副島（2007）の分析には問題点もある。そのため、「つつある」の事象投射構造的 analysis を行う前に、次節においてその問題点を明らかにする。

1.2 副島（2007）の「シツツアル」分析の問題点

副島（2007）の分析における問題点のひとつは、「つつある」と「限界性」との関係である。副島（2007）では「シツツアル」について《不完結》を不変的意味としてもつと分析したうえで、「限界動詞は、シツツアルと結びついて《変化の不完結》を表す」（副島 2007: 72）のに対し、「非限界動詞は、シツツアルと結びついて《動きの開始局面の不完結》を表す」（副島 2007: 88）とし、さらに「非限界動詞のシツツアル形式であっても、コンテキストや他の構文的要素によって外的に限界を設けるといふ条件があれば、《変化の不完結》を表し得る」（副島 2007: 92）としている⁴⁾。

しかし、「つつある」がいわゆる通常の「変化の推移（あるいは変化の進行）」を表す場合、必ず限界動詞、あるいは限界を設けられた非限界動詞に後接しなければならないかという点、（術語上の問題もあって議論が複雑にはなるが）そのようには言い切れない場合がある⁵⁾。

まずその例のひとつとして、副島（2007）の挙げる例文であっても、それが限界点をもつ事象であるかどうかについて判断が微妙となるものが少なくないということが挙げられる。

- (4) a. スポーツや文化活動などイベントを支えるタイプも徐々に増えつつある。(副島 2007: 75)
b. ここ数年、大欧州の一員をめざしたロシアは、いまその夢が遠ざかりつつあると感じている。
(副島 2007: 77)

c. アメリカンスポーツは、国内にとどまらず、海外にその舞台を広げつつある。(副島 2007: 82)

これらの例文にはそれぞれ「ここ3年間」などの期間修飾表現を共起させることも可能であり、またそれぞれの発話時点の直後に事象が終結してもそれぞれ「増えた」「遠ざかった」などの「タ形」で表される事象は真となるため、これらの文が表わす事象は達成事象 (accomplishment events) や到達事象 (achievement events) などの限界事象 (telic events) ではないと考えられる。

また明示的に限界点をもたない事象であっても、「つつある」を用いて「変化の推移 (あるいは変化の進行)」という意味を表すことができる。

- (5) a. 終わりのない道を進みつつある。
b. 無限の階段をのぼりつつあった。
c. 西方へ、西方へと際限なく移動しつつある。
d. その男は常に底なしの穴を掘りつつあった (ように思う／と言える)。
e. どんどん増えつつある⁶⁾。

これらは、高橋 (1996) の「継続動詞／瞬間動詞」という動詞分類による「つつある」の分析を批判する際に、副島 (2007) が「日本外交の重要度もますます高まりつつある」という例文について、「動作の達成によりある結果をもたらす「結果動詞」、すなわち変化達成という限界を内包する限界動詞であるから、」(「高まる」は継続動詞であっても)「「高まりつつある」が「進行」を表すことは自然な帰結として説明できる」(副島 2007: 70, 下線筆者)とし、「結果動詞」「限界動詞」「変化動詞」の概念および「限界事象」と「限界動詞」、「変化事象」と「変化動詞」をほとんど区別せずに扱っていることによると考えられる⁷⁾。これは副島 (2007) に先立つ高橋 (1996) においても「行為の終点が明確化している場合、継続動詞でも「漸時進行」の意味を表すことができる」ことから「ツツアル形は不変的意味として「終点」を常に要求することが導かれるのではないだろうか」(高橋 1996: 104) という一般化がなされていることとも無関係ではないように思われる。

またデータの分析の問題として、副島 (2007) で示された「シツツアル」のそれぞれの関係についても不分明なところが残されている。まず《不完結》という不変的・基本的意味が「変化の不完結」という意味から「くりかえし」という意味を派生する理由について、副島 (2007) は「一連の複数の動作すべてが完結する時点が限界として設定され、シツツアルはその限界への推移過程にあることを表す」(副島 2007: 95)、「派生的意味としての《くりかえし》も、個々の一連の動作を巨視的に1つの変化ととらえている。変化するものが複数であることが条件で、変化する物の数=個々の変化の数、ということになり、量的に限界づけられた変化となる」(副島 2007: 98) と述べている。しかしここでも、先ほど述べた「限界点はほんとうにあるのか」という問題について、挙げられた例文の中にもその存在が必ずしも明確でないものもあり、またそもそもなぜ《変化の不完結》という意味が《くりかえし》という意味に派生するのかという動機についても明確にされていない。さらにここで示されている拡張や派生のメカニズム (なぜ、どのように) が不明瞭であるという理論的問題も含まれている。

次節以降では、「つつある」の事象投射表示について考察していく。本稿では、基本的な考えとして、

現代日本語の「つつある」に必要であるのは「限界点」ではなく「経路」であることを示し、上述の副島（2007）の記述的な問題および理論的な問題を解決したい。

2 「つつある」文の基本的意味の事象投射分析

本節では、はじめに「つつある」のもつ3つの基本的な意味について簡単に確認したあと、それらの意味について、事象投射構造に基づく分析を行う。

2.1 「つつある」が示す事象的意味

森山（2005: 125）では、「つつある」について以下のような記述的説明がなされている。

- ・ ツツアルは、「被害がしだいに拡大しつつある」「供給量を減らしつつある」のように、主体または対象がゆるやかに連続して変化していく過程（進展過程）にあることを状態として表す。
- ・ 「新校舎が完成しつつある」のように、動きが限界点へ到達する直前の状態であることや「我々は未曾有の状況を体験しつつある」のように進行過程を状態として表す用法もある。
- ・ いずれも何らかの動きが進行している状態にあるということを、刻々の推移に着目して表現することになっている。

この森山（2005）および副島（2007）の記述をもとに「つつある」の意味を整理すると、おおよそ以下のようになると考えることができる。

- ・ 「つつある」が表す事象的意味：何らかの経路をもつ事象の「途上」であることを表す。

したがって何らかの（変化）経路を表さない場合には「つつある」をつけることができない。

(6) #? 同じ場所に留まりつつある。

しかしこの経路は必ずしも限界点を必要としない。経路上のすべての任意の2点についてそれらが順序関係をもつことが保証されていれば、経路自体は非有界であってもかまわない。

そして「つつある」と合成される事象が移動・変件事象である場合、「つつある」文はその移動・変化経路の途上であることを表す。そしてこれが高橋（1996）での「進行」、副島（2007）での《変化の不完結》におおよそ相当する。

また「つつある」と合成される事象がいわゆる「非変化動詞」で表される動作事象である場合、例えばその動作事象の開始を「その状態への変化」という起動（inchoative）的変件事象として解釈強制（coercion）を行うことにより変化経路をつくるという場合がある。これが高橋（1996）での「事態成立までの「進行」、副島（2007）での《動きの開始局面の不完結》に相当する。さらに、共起表現や文脈によって参加者の複数解釈が得られる場合には、それら参加者を順に並べることによって複数参加者・事象の経路を創出し、「つつある」文はその経路の途上であるということを表すこともできる。これが副島（2007）での《くりかえし》解釈に相当する。

以下ではこの基本的な3つの「つつある」の意味について、事象投射意味論における形式化を行い、その妥当性を示す。

2.2 「つつある」の概念構造

上述の意味的性質をもつ「つつある」の概念構造については、実は岩本(2008)が「英語の進行相」および「西日本方言のヨル」で仮定した構造を充てるのが最も適切である。岩本(2008)では、動作継続・結果継続、さらに動作パーフェクトまで表すことのできる日本語の「テイル」に対して「時間だけを止める」概念構造、すなわち時間項のみに CRS (断面化関数)⁸⁾ が適用される構造を与えているのに対し、「英語の進行相」および「西日本方言のヨル」に対しては「構造束縛保持された時間と動きの両方を止める」概念構造を与えている(岩本 2008: 186-187)。

(7) テイルの概念構造 (岩本 2008: 186 改⁹⁾)

$$\left[\begin{array}{c} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^\alpha \uparrow \\ \left[\begin{array}{c} 1d, + \text{dir} \\ \text{Time} \quad -\text{境界}^{10)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(8) 英語の進行相 (岩本 2008: 192 改), ヨル (岩本 2008: 258 改)

$$\left[\begin{array}{cc} [0d] & [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^\alpha \uparrow & \langle \text{CRS} \rangle^\alpha \uparrow \\ \left[\begin{array}{c} 1d, + \text{dir} \\ \text{Space/Property} \quad -\text{境界} \end{array} \right] & \left[\begin{array}{c} 1d, + \text{dir} \\ \text{Time} \quad -\text{境界} \end{array} \right] \\ \text{Sit} \quad \cdots & \end{array} \right]$$

しかし英語の進行相の場合、移動(位置変化)や状態変化をもたない dance や cry のような動作動詞であっても進行相をもつことができる。これに対し岩本(2008)では、「英語の場合、John is pushing the locked door や They are holding each other's hands は、[動作継続]の意味を表す。英語の進行相でも CRS は二つの投射項に義務的に CRS が適用するように指定してあるが、動詞の語彙事象構造が時間項だけしか投射しない場合、進行相の指定に修正を加えて用いるしかほかに方法がない」(岩本 2008: 263)として時間項だけの投射を認めているが、具体的にどのような条件のもとで、どのような「修正」が加えられているのかについては明示されておらず、もともと時間項だけの投射をもつ日本語の「テイル」との差異がわかりにくくなっている。

また西日本方言のヨルについては、英語の進行相に対して「ヨル・トル方言の場合、二つの選択肢があるので、わざわざ修正を加えなければならないヨルを用いると不適格となるのである」(岩本 2008: 263)と述べ、同じ動詞を用いた場合であっても状態が変化しない維持的事象にヨルがつくことはできない(9a, b)のに対し、変件事象が稠密的である([+連続]である)作成事象などの場合はヨルが可能となる(10a, b)ことから、ヨルに対しても上述の「構造束縛保持された動きと時間の両方を止める」概念構造が考えられている。

- (9) a. * 太郎が鍵のかかったドアを押しよる.
 b. * 花子は子供の手を握りよる. (岩本 2008: 262)
- (10) a. 故障した車を後ろから押しよる.
 b. 寿司を握りよる. (岩本 2008: 263)

しかし工藤 (2011: 178) には「ヨルが〈終了前=進行段階〉を表す動詞」として「たたく、降る、暮らす」などのような非変化動作動詞の例も挙げられているため、少なくとも工藤 (2011) が挙げる宇和島方言に対しては、英語の進行相の場合と同じく、具体的にどのような条件のもとで、どのような「修正」が加えられているために時間項だけの状態化がヨルによって可能となっているのかということについて、明示的に示す必要がある。

その点「つつある」については、本節のはじめでも見たとおり、時間項以外の項がもつ経路についても厳密に適用され、そのような経路をもたない事象については起動的解釈や複数解釈などの強制解釈方略を用いて「経路」を確保していると考えられる。そこで本稿では、(8) に挙げた概念表示こそが日本語の「つつある」の概念構造であると考え¹¹⁾。

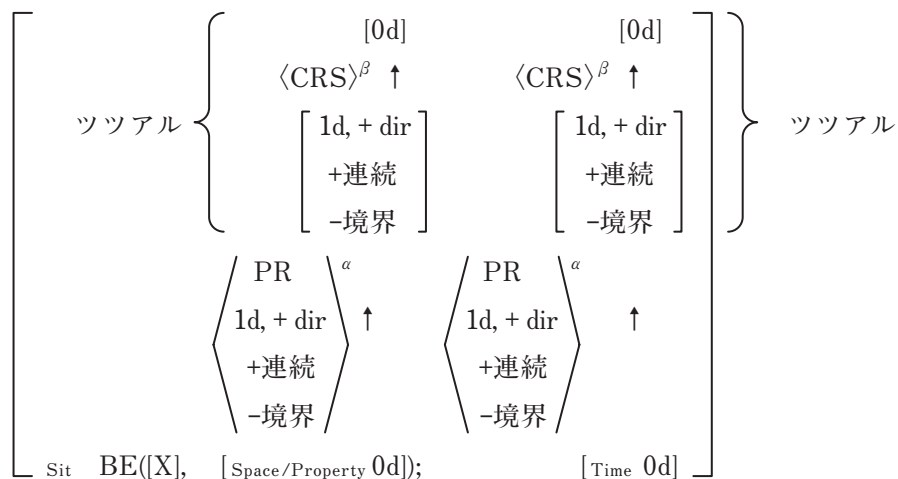
それでは次節より順に、移動・変件事象の進行を表す「つつある」文 (2.3.1)、動きの開始局面を表す「つつある」文 (2.3.2) の事象投射構造について、岩本 (2008) の示す構造を参照しながら、見ていくことにする¹²⁾。

2.3 基本的「つつある」文の事象投射構造

2.3.1 移動・変件事象の漸次進行を表す「つつある」文の事象投射構造

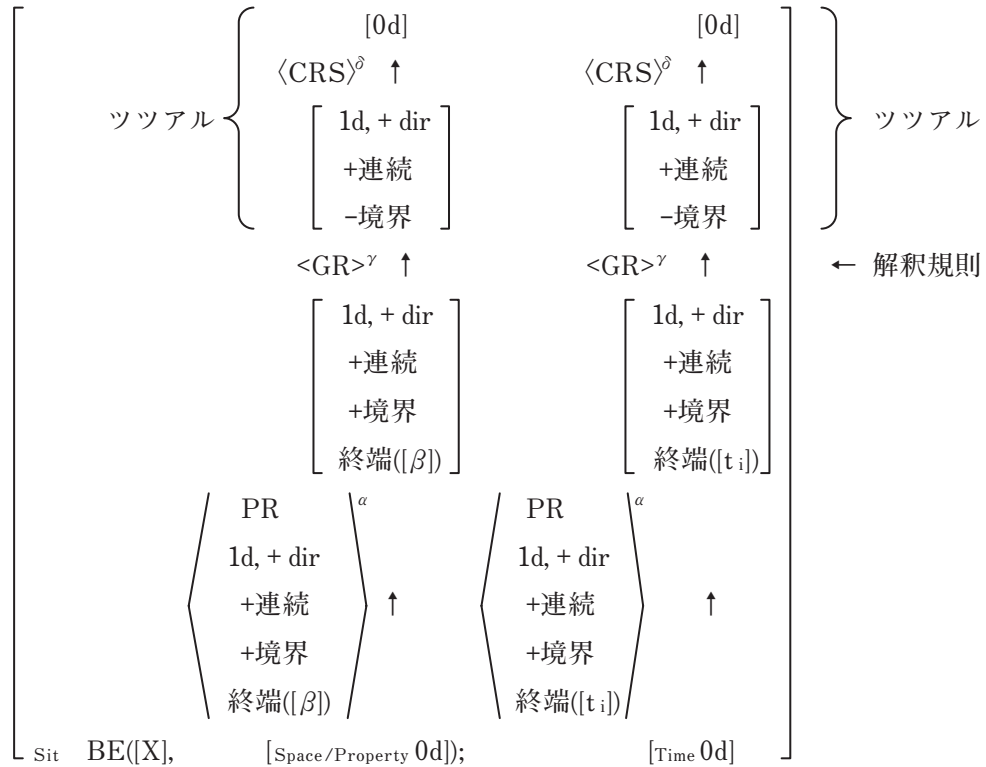
はじめにもっとも基本的な意味である移動・変件事象の漸次進行を表す「つつある」文の事象投射構造について考える。移動事象や位置変件事象の場合、文字どおりの経路¹³⁾ が CRS の適用を受ける対象となる。はじめに非有界事象 ([-境界] 事象) について、岩本 (2008) での「流れている」(岩本 2008: 189)、「泳いでいる」(岩本 2008: 195) の事象投射構造から、「つつある」の構造表示は以下ようになる。

- (11) 移動・変件事象の漸次進行を表す「Vつつある」の事象投射構造 ([-境界] 事象)



また [+境界] 事象に CRS 関数を適用する場合は、GR 関数の適用などによって境界を除いてから適用する必要がある。そのため [+境界] 事象と「つつある」を合成する場合は以下ようになる。

(12) 移動・変件事象の漸次進行を表す「Vつつある」の事象投射構造（[+境界] 事象）



また変件事象のなかには、上述のような対象 = 主題項 (theme) の移動による位置変化や、対象の性質が変化するという状態変化ではないものがある。それが対象の出現や消滅にかかわる変化で、出現や消滅そのものを表す事象のほか、いわゆる作成事象や消費事象、増分変件事象も含まれる。この場合、対象が全体として漸次的に出現する事象については、特徴項が「IN EXISTENCE (存在)」という値へと変化する連続経路を充てればよく、また対象 = 主題項が二値的な変化を受ける増分変件事象の場合¹⁴⁾は、連続経路として増分主題項を考えれば、時間項との構造保持束縛をもつ経路を確保することができ、「つつある」合成を行うことができる (岩本 2008 : 303 の増分的段階性到達事象の投射構造を参照のこと)。

移動・変件事象の「つつある」文の分析について、ひとつ付け加えておくことがある。副島 (2007) は、同じく進行的意味を表す「ている」との関係について、「動きのみを表す非限界性の動作はシテイル、変化のみを表す主体の状態変化を表す場合はシツツアルでしか言えない。」(副島 2007: 111) と述べたあと、「また、動きと変化の 2 側面的な動作の場合でも、実際の文上、すなわち、意味上は動きか、変化かのどちらかに焦点を置いて解釈されるとするなら、その動詞の表す動作を、動きに焦点を置いて主体の立場から解釈する場合はシテイルのほうが望ましく、逆に変化に焦点を置いて客観視的に解釈する場合はシツツアルのほうが望ましくなる」(副島 2007: 111, 下線筆者) と述べているが、その理由については明示的には述べられていない。

この理由については、上で明らかにした「つつある」と、岩本（2008）で示されている「ている」の概念構造を比較してみるとはっきりとする。上述のとおり、「つつある」の概念構造は時間項ともう一つの項（空間項や主題項など）に対してCRSを適用しなければならないのに対し、「ている」は時間項のみにCRSを適用するだけでよい。すると副島（2007）の調査した2側面動詞＝主体動き・客体変化動詞の場合、「つつある」との概念合成のためには「客体変化」部分（BEを含む事象投射構造）にCRSが適用されなければならないが、したがって「変化が進行中である」という意味表示となる。それに対し「ている」の場合は時間項のみにCRSを適用すればよいので、より操作が単純となる「主体動き」部分（AFFを含む事象投射構造）にCRSを適用するだけで、変化については未指定のまま概念合成が可能となり、したがって「動きが進行中である」という意味表示となる。副島（2007）の観察結果は、以上の理由によりひきおこされたものである。

以上、移動・変理事象の漸次進行を表す「つつある」の事象投射表示について、いくつかの場合に分けてみてきた。しかし、語彙的に[-連続]事象解釈が優勢となるいわゆる到達動詞類の場合、「つつある」との合成によって解釈規則（[-連続] → [+連続]）が適用され、漸次進行を表すことができる場合もあるが、所有の移動を表す動詞や二値的な特徴項しかもたない変化を表す動詞の場合、それらが移動・変理事象を表していても、その事象の漸次進行を表すことが不可能であるか、たいへん難しい。またそもそも移動・変化の経路をもたない動作動詞の場合、「つつある」との合成において何らかの別の解釈規則を適用する必要がある。次節では、副島（2007）において《動きの開始局面の不完結》とよばれている「つつある」文の事象投射構造について考察する。

2.3.2 動きの開始局面を表す「つつある」文の事象投射構造

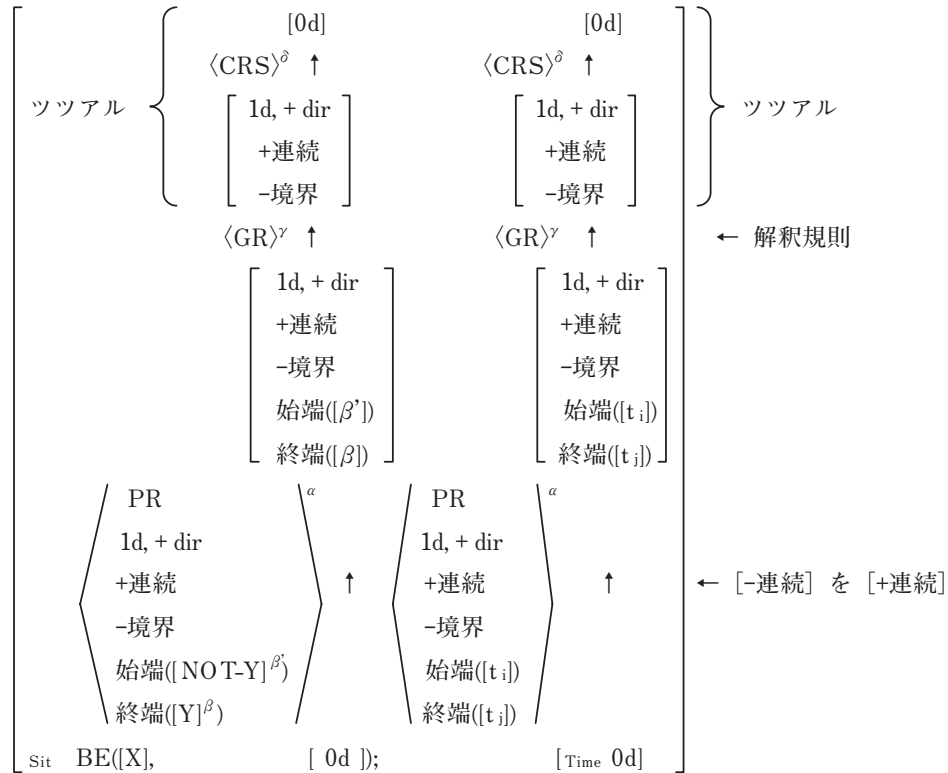
副島（2007）では《動きの開始局面の不完結》を表すシツツアルについて、「限界動詞が実現する《変化の不完結》の意とかけ離れているわけではない」（副島 2007: 90）として、「限界動詞の場合、動詞が内包する限界とは、動詞が表す変化の達成点、すなわち変化という状況の成立点であるが、非限界動詞の場合、状況の成立点にあたるのは動きの開始点である」（副島 2007: 90）と述べ、両者の関連性を示唆している。しかし副島（2007）ではその「平行的な関係」（副島 2007: 90）については具体的に示されていない。

そこで本稿では、ここでも岩本（2008）のヨルの「開始限界前の一点」表示を受け継ぐ。岩本（2008）では、ヨルの表す〈開始限界前の一点〉という意味について、「Situation Y（の出現）を終了限界とする変化に至る一点」（岩本 2008: 260）と捉え、投射構造を仮定している。本稿では「つつある」についてもほぼ同じ事象構造をもつものとする。

ただし、英語の進行相やヨルの場合と異なり、「つつある」の場合は「Yでない状態からYである状態へ」という経路の途上であるという意味をもつため、単なる「開始限界前の一点」ではなく「何らかの「動き」が開始したが、完全にその「動き」には至っていない状態」であることを表す必要がある。例えば高橋（1996）では「その時、列車はゆっくりと走りつつあった。」という例文について、「文脈なしでは、《車輪が徐々に回り始めた状態からだんだんスピードを増していく》という、動詞の表すコンスタントな動きの成立までの過程を表している読み」（高橋 1996: 102）と述べている。そのため事象投射表示には始端事態として値「NOT-Y」を指定する。ここではNOT-YからYへの

状態変化が「+連続」という性質をもつ経路，すなわち「完全に『Yでない』」状態から「完全に『Yである』」状態への段階的変化を考えることとなる．そして「つつある」はその変化の途上であることを表しているのである．

(13) 動きの開始局面を表す「Vつつある」の事象投射構造



副島（2007）に挙げられている《くりかえし》の意味については，紙幅の制限上ここで取り上げることができないが，岩本（2008: 232-247）あるいは小西（2011）の複数事象の投射構造を参照されたい．概要をいえば，対象の複数化という解釈規則の導入により「経路」を作成し，「つつある」の CRS の適用を可能とするという方略である．

それでは次節において，これまでの分析では明示的には取り上げられてこなかった「つつある」文について，見てみることにする．

3 その他の「つつある」文

先行研究において，「つつある」の表す意味については「推移」「進行」などの用語で直感的に説明されることが多かった．本稿ではこれまで「つつある」の意味について，空間項・特徴項・主題項などがもつ経路に対して，時間項と構造保持束縛関係をもちながら CRS 関数を適用することにより表される状態を表すとして，それぞれについて事象投射構造表示を用いた形式的な説明を試みた．実は，先行研究では上のような直感的な説明であったために，特に明示的には取り上げられていなかったが，本稿での形式的な分析により初めて明らかになった他の「つつある」文が存在する．本節ではそのうちの 3 種類の「つつある」文を取り上げ，それぞれの事象投射分析を提示する．

3.1 時間の経過を表す動詞の「つつある」文

そのひとつは、時間経過動詞の表す事象と合成される「つつある」である。

- (14) a. 刻々と時間が経過しつつある。
b. そのころ、僕は無為な日々を過ごしつつあった。

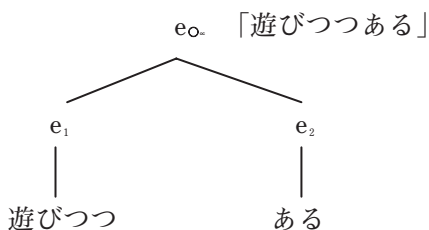
これらの動詞の場合、(14a)では「時間」、(14b)では「無為な日々」という時間（あるいは期間）を表す名詞句が対象＝主題項となっている。したがって、2.3.1でみた増分変件事象と同じく、場合によっては適宜複数化などの解釈規則を通じて、増分主題を経路としてもつ事象投射構造を考え、その経路と（通常の）時間項に対してCRSを適用させるという構造をもつと考えられる。

3.2 「暮らし」を表す「つつある」文

同じように「時間を過ごす」ことを表すが、項として時間的意味を表す名詞句をとらない、以下のような「つつある」文が存在する。

- (15) a. そのころはもう引退して、孫たちとともに遊びつつあった。
b. この3年ほどは毎日、お師匠さんについて書を学びつつあります。

これらの文はおおよそ「～しながら毎日を過ごしている」という意味を表している。そのため、「～つつある」の部分で「～つつ過ごしている」「～つつ暮らしている」としてもほとんど意味は同じである。この「つつある」文の場合、「つつある」というまとまりが単一の機能をもつと考えていたこれまでの文に対し、「つつ」と「ある」が比較的独立したものとして機能していると考えられる。そこでこの場合の「つつある」については、以下の複合事象的投射構造を考える（それぞれの下位事象内の詳細については省略する）。



「つつ」は従属節の表す事象（ e_1 ）と主節の表す事象（ e_2 ）が時間的に重複していることを表す接続表現であるため、両下位事象が〈包括的重複部分関係〉にあることを示す記号 \circ_{∞} を上位事象 e に付す。

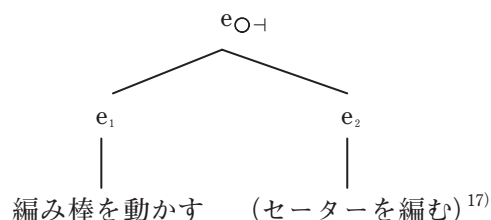
ただしこのように分析した場合、「ある」の主語となるべき対象が人間などとなることもあり、存在動詞の有生性（有情性）の一致を考慮すれば「～つついる」となるべきであるとの反論が考えられる。ここではそれに対する決定的な証拠を挙げることはできないが、この「つつある」文が、現代日本語においては所在文（「～に～が～つつある」のような文）には現れないこと、この「つつある」文の

みが存在動詞の謙譲形「おる」(実際の形は「~つつおります」となる)を容認することなどを挙げ、傍証としたい。ただし存在動詞の尊敬形「いらっしゃる」は「おる」に比べて容認度が低く感じられること、テ形に接続する相形式である「ている」の場合はどちらもほぼ自由に容認できることなどもあり¹⁵⁾、さらなる根拠が必要である。

3.3 別事象により経路が設定される「つつある」文

高橋(1996: 102-104)は、「中年の女は、息子のセーターを編むために、日だまりで編み棒を動かしつつあった。」という例文に対し、「[編み棒を動かす]のは、[セーター]ができるまでである」とし、ツツアル形はこの「終点をめざして進んでいく進行を記述する」と述べ、終点を明確にできない事態である「*(目の前の状況を描写して)子どもたちが遊びまわりつつある。」という文が非文であることを挙げている。また副島(2007)もこの例文を取り上げ、「非限界動詞でも、主体の行う動きの量、動きの目的を明示、あるいは、客体を特定化してその量を明示することによって規定された場合、動きというよりも動きの量的変化の側面が前面に押し出され、規定された量の限界にむかって、主体の動きが進行していることを表す」(副島 2007: 92)と述べている。しかしこれらの説明では単なる増分変化作成事象である「セーターを編みつつある」との事象内的な違いが明らかでなく、また実際に「何が」「どのように」「どのような形・プロセスで」量として明示されると「なぜ」これらの「つつある」文が可能となるのか、具体的な説明はされていない。

本稿では、高橋(1996)の例文は、概形として以下の事象投射構造をもつと考える。そして「編み棒を動かす」という事象 e_1 が、セーターを編む(セーターができあがる)という事象 e_2 (より正確には「セーターが存在する」という状態を完了点(culmination point)としてもつ BECOME 事象)と増分関係¹⁶⁾をもちながら、セーターの完成(出現)により限界づけられるという〈包括的終端同時重複部分関係〉をもつため、複合上位事象 e には記号 e_{O-H} を付す。



ここで、高橋(1996)の例文では作成動詞「編む」が用いられているが、以下の例のとおり e_1 事象に関係する動詞が動作動詞(activity verbs)であり e_2 事象に関係する動詞が到達動詞(achievement verbs)であっても問題はない。

- (16) a. パズルを完成させるために、彼女は試行錯誤しつつある。
 b. 合格するために、彼はたくさんの本を(くりかえし)読みつつあった。

ここで、通常は非結果事象を表す「(編み棒を)動かす」と「つつある」との合成を見てみよう。まず「(編み棒を)動かす」は動作事象([+連続, -境界]事象)としてPR投射される。ここから「つつある」と合成する場合、「つつある」は前節で見たとおり時間項のほかにも断面化関数 CRS が適用される「経

路]を必要とする。前節 2.3.2 では解釈規則として「Y でない状態から Y である状態へ」という [+連続] 変化経路を導入して動きの開始局面を表したが、本節の例の場合は「セーターを編むために」という目的を表す表現のため、「(編み棒を) 動かす」という動作事象を下位事象 e_1 とし、セーターが完成するという変化事象 (BECOME 事象) を下位事象 e_2 としてもつ達成事象 e を構成し、さらに e_1 と増分関係をもつ変化事象 e_2 を「経路」として CRS が適用されることができると考えることができる¹⁸⁾。

以上、本節では、新たに3つの「つつある」文について分析を行った。これらの文がもつ事象的意味は、事象投射構造による形式的な分析によって明らかになったものであるといえる。

4 まとめ

本稿では、はじめに副島 (2007) などの先行研究を概観し、問題点を整理した。第2節では「つつある」の事象投射概念構造を示し、さらに先行研究で挙げられていた「つつある」の意味のうち、特に移動・変化事象の漸次進行を表す「つつある」、および動きの開始局面を表す「つつある」の事象投射構造を示した。第3節では、これまで明示的に扱われていなかった3つの「つつある」文について、事象投射理論による形式的分析を行った。

註

- 1) 本稿では基本的に「つつある」と表記するが、先行研究に言及する場合はそれぞれの論文内における表記で示す。
- 2) 紙幅の関係で、本稿において事象投射意味論についての詳細な説明を提示することはできない。理論の詳細および各種記号の詳しい説明については、岩本 (2008) または岩本 (2010) を見ていただきたい。また例文はできるだけ先行研究で挙げられているもの、および作例についてはできるだけ自然なものを心がけたが、それほど自然ではないと感じられるものも含まれている。これは、竹内 (2011) の研究にもあるように近代語の「つつある」という形式自体が「欧文翻訳を契機として書記文体の中で発達したもの」(竹内 2011: 159) であり、金水 (2011) のいう「広域言語」のレベルの言語に属する表現であると考えられるため、容認性の判断や新奇表現への適用がある程度規範的にならざるを得ず、それに伴って自然度も下がってしまうためであると考えられることができる。
- 3) 副島 (2007) ではそれぞれ主体の状態変化、主体の位置変化の不完結、主体の出現・消滅の不完結などの動詞ごとに分析を行っているが、それらのひとつひとつの詳細については議論に影響はないため、ここでは省略する。
- 4) これは高橋 (1996: 102-104) が以下のように述べているのとほぼ同じであると考えられることができる。高橋 (1996) は「テイル形は継続動詞と一緒にあっていわゆる「進行」を表し、瞬間動詞はツツアル形を介することによって「進行」になる。そして、ツツアル形が継続動詞と共起すると、事態成立までの「進行」つまり「漸時進行」を表す、と定義してもよさそうに思われる」(高橋 1996: 102) と述べ、ツツアルが継続動詞と共起しながらもテイル形と同様の「進行」の事態を指示できる条件として i) 目的が明確にされている場合：目的の副詞句や移動動詞に目的地が明示されている場合（「列車は、故郷へと走りつつある。鴨が向こう岸に向かって泳ぎつつあった。」）、ii) 限定詞を伴った目的語がある場合：目的語に数詞やコソアなどの指示詞、また

その目的語の指示物を同定し得るような修飾句が伴う場合（「父は一通の手紙を書きつつあった。母はそれらの食器を洗いつつある。」）、iii)「結果の目的語」を伴っている場合（「家を建てつつある。橋を架けつつある。」）を挙げ、「以上3つの条件に共通している点は、動詞が表す行為の終点（限界、完了点）を明確化したということ」（高橋 1996: 103）「以上の例から分かるように、ツツアル形は不変化的意味として「終点」を常に要求することが導かれるのではないだろうか」（高橋 1996: 104）「また、この終点というものが不変的意味として要求されることから・・・「方向」というニュアンスも現れる。なぜなら、「方向」は、たとえ暫定的であっても向かうべき方向を示唆する点が規定されてはじめて明確化されるものであるからである。つまり不変的意味としても終点というものが要求されるツツアル形に「方向」というニュアンスが伴うことも必然的であると思われる」（高橋 1996: 104）と述べている。そして副島（2007）は、高橋（1996）の「継続動詞／瞬間動詞」という分類を批判し、「限界動詞／非限界動詞」という分類とするべきであると述べながらも、高橋（1996）の「〈終点を必ず要求する進行〉を普遍的意味として表す」という分析に対し「基本的には正しく、筆者も支持したい」（副島 2007: 70）と述べている。

- 5) ここで「術語上の問題」と言ったのは、動詞分類とその名づけにおいて、「すべての変化動詞は内的限界をもつことができる（ことが多い）ため、実質的に限界点をもっていなかったり、限界事象を表していなかったりする場合でも一律に『限界動詞』とよぶ」というような用語法であった場合、森山（1988）などが「漸進的变化」、あるいは Dowty（1979）らが degree achievements などとよんでいる場合も「限界動詞を用いた非限界事象」ということになってしまう、という意味である。
- 6) 「どンドン」文は非有界事象を表す（小西 2011）。
- 7) 前後の文を含めると、「ますます高まりつつある」という例について、副島（2007: 70-71）は以下のように述べている。「「高まる」はある時間続いて行われる動作を表しているという点で「継続動詞」といえるが、「高まりつつある」は後部的要素における終点の明確化がなくても「進行」を表している。…シツツアルは「結果動詞」と結びついて「進行」を表すと説明すれば、「高まる」は動作の達成によりある結果をもたらす「結果動詞」、すなわち変化達成という限界を内包する限界動詞であるから、「高まりつつある」が「進行」を表すことは自然な帰結として説明できる。…「瞬間動詞／継続動詞」という分類よりも、限界動詞／非限界動詞という分類にもとづくほうが、シツツアルの意味の実現の仕方はうまく説明できるのである」（副島 2007: 70-71）
- 8) 「CRS (cross-section function : 断面化関数)」は、1d ~ 3d の実体から断面を抽出する関数で、動態 (1d) に適用されると状態 (0d) が抽出される関数である。[-境界] 実体にのみ適用される。(cf. 岩本 2008: viii)
- 9) より見やすくするために、岩本（2008）の表記を少し変えてある。
- 10) ここで [-境界] 素性を条件とするのは、[+境界] 事象における境界点（始端や終端）を CRS 関数によって断面化することができないためである。
- 11) 竹内（2011）はテイルとの関係によるツツアルの意味変化のようすを、工藤（2001）のヨルの文法化の経路と対比させながら論じている。このような通時的な関係の影響については、今後の課題としたい。
- 12) くりかえしを表すものについては、紙幅の制限上、構造の示唆にとどめる。
- 13) 投射表示では空間項 (Space) / 特徴項 (Property) として示されている項において、この項

の素性が境界点のみをもつ [-連続] ではなく [+連続] であることから、空間的／特徴的経路をもつことが示されている。

- 14) 例えば「パンを食べる」という増分変化消費事象の場合、対象（のある部分）についてはそれが存在しているか、それとも存在していないかといういずれかの値をとる。
- 15) 「ている」との関係については、竹内（2011）の通時的研究も視野に入れつつ考察する必要がある。
- 16) Rothstein（2004: 108）では、増分関係について以下のように定義している。

Incremental relations

Let e_1 be an activity, e_2 be a BECOME event, and $C(e_2)$ be an incremental chain defined on e_2 .

$INCR(e_1, e_2, C(e_2))$ (e_1 is incrementally related to e_2 with respect to the chain $C(e_2)$) iff:

there is a contextually available one-one function μ from $C(e_2)$ onto $PART(e_1)$ (the set of parts of e_1) such that: for every $e \in C(e_2)$: $\tau(e) = \tau(\mu(e))$.

- 17) 事象投射構造の形成過程については、本稿では具体的に示すことができないが、ここでは達成事象 e の「結果下位事象」である e_2 には、「ために」節から直接「セーターを編む」事象が組み込まれるのではなく、「何らかの BECOME 事象としての e_2 があり、直前に言及された「セーターを編む」事象が語用論的に該当事象として解釈される」と考えている。
- 18) 他にもこのような解釈強制を行う構文として「まで」句／節があるが、詳細については別稿にゆずりたい。

文献

- 岩本 遠億（編著）2008 『事象アスペクト論』、開拓社。
- 岩本 遠億 2010 「経路移動事象の両義的限界性と増分性」、影山 太郎（編）『レキシコンフォーラム』 No.5, ひつじ書房, 53-97.
- 金水 敏 2011 「日本語史とは何か 一言語を階層的な資源と見る立場から一」、『早稲田大学日本語研究』 第20号, 3-10.
- 工藤 真由美 2001 「アスペクト体系の生成と進化 ー西日本諸方言を中心に」, 言語学研究会（編）, 『ことばの科学 10』, むぎ書房, 117-173.
- 工藤 真由美 2011 「愛媛県宇和島方言の時間の捉え方 標準語の文法を相対化する視点」, 呉人 恵（編）『日本の危機言語一言語・方言の多様性と独自性』, 北海道大学出版会, 171-185.
- 小西 正人 2011 「現代日本語「どんどん」文の事象構造分析」, 『北海道文教大学論集』 第12号, 83-97.
- 副島 健作 2007 『日本語のアスペクト体系の研究』, ひつじ書房.
- 高橋 純 1996 「『～つつある』について」, 『日本語教育』 第89号, 100-110.
- 竹内 史郎 2011 「近代語のアスペクト表現についての一考察 ーツツアルを中心にー」, 青木 博史（編）『日本語文法の歴史と変化』, くろしお出版, 151-173.
- 森山 卓郎 1988 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院.
- 森山 卓郎 2005 「ツツアル・テクル・テイク ー直前, 変化の進展など」, 日本語教育学会（編）『新版 日本語教育辞典』, 大修館書店, 125-126.
- Dowty, David R. 1979. *Word meaning and Montague grammar*. D. Reidel Publishing Company.
- Rothstein, Susan. 2004. *Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect*. Blackwell Publishing.

An Analysis of Japanese Aspectual Suffix *-tutuar-* in Event Projection Theory

KONISHI Masato

Abstract: Jackendoff (1996) first originated his idea of representing eventualities by decomposing them into axis plus cross-section. A decade later, Iwamoto (2008) developed that theory using the key concept of “event projection” and made it more generative and useful, calling it event projection theory. In this paper I analyze the Japanese aspectual suffix *-tutuar-*, which roughly means “in the process of V-ing, be tending to V-ing,” and present its conceptual structure in the form of event projection theory proposed by Iwamoto (2008). In section 1, I review Soejima’s (2007) previous work, and summerizing his claim about *-tutuar-* as representing 3 types of meaning, giving some critical comments about its telicity constraint. Then in sections 2.1 and 2.2, I assign *-tutuar-* a conceptual structure, which requires verbal events unified with ‘*-tutuar-*’ to have some “paths,” such as transfer paths, change-of-state paths, or incremental paths of themes. Actually, this structure is assigned for the English progressive and the verbal suffix *-yor-* of the Western Japanese dialect in Iwamoto (2008), and I insist that *-tutuar-* is the most appropriate morpheme to have this structure. In section 2.3, using the structure of *-tutuar-*, I analyze these 3 types of *-tutuar-* and assign each of them unified event projection structures, in accordance with the structure for English progressive presented in Iwamoto (2008). In addition, by formalizing these meanings rigidly, some types of *-tutuar-* are found not to fit these unifications. In section 3, I focus on these types of *-tutuar-* that do not fit, i.e., *-tutuar-* with time-passing transitive verbs such as *sugos-* (3.1), *-tutuar-* meaning “to live in V-ing” (3.2), and *-tutuar-* with an incremental accomplishment event built by a coerced interpretation (3.3). I roughly present for each of them their event projection structures and present why and how they can be unified with *-tutuar-* and get such interpretations.